

JAPAN RESEARCH JOURNAL OF RUGBY FORUM

No.19 (Supplement) March 2026

ラグビーフォーラム

令和8年3月

日本ラグビー学会

Japan Society of Rugby

日本ラグビー学会第 19 回大会

令和 8 年 3 月 28 日 (土)

会場：関西学院大学大阪梅田キャンパス

〒530-0013 大阪府大阪市北区茶屋町 19-19 アプローチタワー 14 階

目 次

1. 第 19 回大会長挨拶
2. 大会スケジュール
3. 大会案内
4. 発表案内
5. シンポジウム
6. 一般発表（口頭）抄録

1. 第19回大会長挨拶



溝畑 潤 / Jun Mizohata

関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授

日本ラグビー学会理事長

第19回大会の大会長を仰せつかりました溝畑潤です。日本ラグビー学会は、多くのラグビー関係者が研究だけに留まらず、ラグビーに関連する様々な情報発信を担う学術団体であることを理念に発足されました。

ラグビーは、これまで学校教育現場において、社会性および人間形成などを養成するスポーツとして高く評価されてきました。しかし、昨今はラグビーがこれまで以上に子どもの進学や就職の手段となっているかのように思われます。

前回大会（第17回大会）では、そのような子どものラグビー環境において、公立高校であることや部員不足という問題を抱えながらも、全国大会出場を目標にたゆまない努力をされている公立高校のラグビー部顧問の先生方にご登壇頂き、今後の高校ラグビーの課題と展望についてご意見を頂戴しました。

今大会は花園の全国高校大会とほぼ同時期に開催される全国高等専門学校ラグビー大会において、長期にわたり大会の運営に貢献されている神戸市立高等専門学校の小森田敏先生、常にベスト4に進出するチーム作りをされている仙台高等専門学校の柴田尚都先生、今大会も優勝し3連覇を成し遂げた奈良高等専門学校の森弘暢先生、日本ラグビー学会の理事であり、日本ラグビーフットボール協会の様々な機関でご活躍されている豊田高等専門学校の高津浩彰先生をシンポジストにお招きして、高等専門学校ラグビーの魅力や現状についてお話しをお伺いします。

末筆になりますが、本大会を開催するにあたり、ご尽力を賜りました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

2. 大会スケジュール

理事会	・・・・・・・・・・・・・・・・	11:00～11:50	1407 教室
総会	・・・・・・・・・・・・・・・・	12:00～12:50	1405 教室
開会式	・・・・・・・・・・・・・・・・	13:00～13:05	1405 教室
一般発表	・・・・・・・・・・・・・・・・	13:10～16:05	1405 教室
シンポジウム	・・・・・・・・・・・・・・・・	16:15～17:45	1405 教室
閉会式	・・・・・・・・・・・・・・・・	17:45～17:50	1405 教室
意見交換会	・・・・・・・・・・・・・・・・	大会終了後	*意見交換会

会場：HUB「BRITISH PUB」梅田茶屋町アプローズ店
梅田茶屋町アプローズタワー地下1階

参加希望者は受付時に参加費（5,000円程度）をお支払いください

3. 大会案内

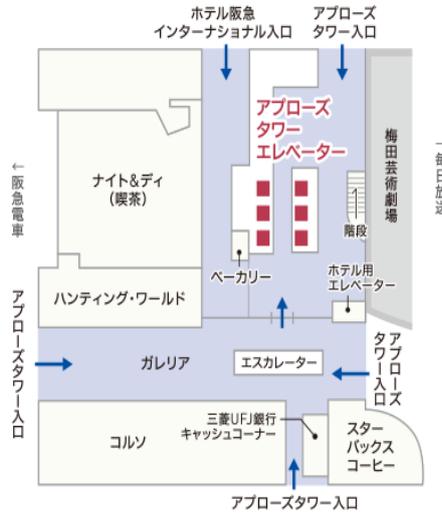
a. 会場

・ 関西学院大学大阪梅田キャンパス

日時：2026年3月28日（土）11：00から17：00（予定）

会場：関西学院大学大阪梅田キャンパス14階

〒530-0013 大阪府大阪市北区茶屋町19-19 アプローズタワー 14階



大会本部	1404 教室
理事会	1407 教室
総会	1405 教室
開会式および閉会式	1405 教室
一般発表	1405 教室
シンポジウム	1405 教室



b. 受付

- ・総合受付場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス 14 階フロアー
受付時間：10:30-15:00
- ・大会参加費等 会員と学生は無料。一般は 1,000 円 (※)。
※：但し一般参加者が次年度から本学会員となる場合は参加費を無料とする。
- ・必ず受付で入場手続きを行ってください (参加者名簿に氏名と所属を記入して下さい)。
- ・学会入会手続きも総合受付で行っております。

c. 諸注意事項

- ・キャンパス内では係員の指示に従ってください。
- ・教室内での携帯電話での通話を禁じます。
- ・キャンパス内は禁酒・禁煙です。
(飲み物はペットボトル、または蓋つきカップに限ります)
- ・貴重品はお預かりしません。手荷物の管理は各自でお願いします。
- ・大会事務局では盗難や事故について一切の責任を負うことはできません。

d. 大会実行委員

溝畑潤 (関西学院大学)、青木敦英 (芦屋大学)、灘英世 (関西大学)
学生スタッフ：石ヶ森千隼、安達涼人、大塚彩生、長谷川果音 (関西学院大学)

4. 発表案内

- a. 発表方法
 - ・発表は口頭で行います。
- b. 進行
 - ・発表者は各セッションとも座長の司会によって進行します。座長の指示を遵守してください。
- c. 発表時間
 - ・発表時間「10分」・討論「5分」の合計「15分」です。ただし、フロアーから活発な質問等のある場合には、座長の裁量で討論時間の調整を行ってください。時間厳守でお願いします。
- d. 資料配布
 - ・資料を配布される方は、各自で準備し、大会当日に持参のうえ、発表受付担当者に提出してください。50部を準備してください。
- e. 機器使用
 - ・PCはこちらで用意します。発表データを記憶媒体（USBなど）でお持ちください。
- f. 発表取消
 - ・プログラムに掲載されている発表者が、不測の事情によって欠席せざるをえない事情の生じた場合には、大会事務局にできるだけ早くご連絡ください。連名発表の場合には、連名者が大会本部の承認を得て発表を代行することができます。
- g. 座長要領
 - ・座長は、各発表会場受付で受付を行ってください。座長は開始「20分」前までに必ず受付を済ませてください。座長はフロアーからの質疑等を促し、研究発表の円滑な運営が進行するようにご協力をお願いします。

5. シンポジウム

(16 : 15～17 : 45)

テーマ：「高等専門学校ラグビーフットボールの在り方について」

司会：村上晃一理事

(日本ラグビー学会理事、ラグビージャーナリスト)

【シンポジスト】

小森田敏（神戸市立高専ラグビー部監督）



熊本県出身

筑波大学卒 筑波大学大学院修了。

1995年から神戸市立工業高等専門学校講師、准教授を経て2012年より同校教授。1998年から関西ラグビーフットボール協会高専委員会委員。2008年から2019年まで日本ラグビーフットボール協会ユースコーチ。2001年から2021年まで日本ラグビーフットボール協会スタートコーチトレーナー。2022年から日本ラグビーフットボール協会C級コーチトレーナー。

柴田尚都（仙台高専名取キャンパス ラグビー部監督）



大阪府出身

仙台大学卒 筑波大学研究生。

1995年に宮城高等専門学校（現仙台高等専門学校名取キャンパス）講師、助教授を経て2015年より同校教授。1994年から同校監督。2003年に1年間、ニュージーランドのクライストチャーチにおいて在外学術研究の為、留学。元宮城県協会レフェリー委員長。現在は宮城県ラグビー協会副会長、宮城県女子ラグビーチーム監督（2025年国スポ滋賀県大会出場）。

高津浩彰（豊田高専ラグビー部監督）



愛知県出身

筑波大学卒 筑波大学大学院修了。

1994年から豊田工業高等専門学校講師、助教授を経て、2011年より同校教授。（2009 沼津工業高等専門学校准教授 人事交流のため）1995年から豊田工業高等専門学校ラグビー部監督（現在に至る）。2006年から日本ラグビー学会理事。2006年から日本ラグビーフットボール協会C級コーチ。World Rugby エデュケーター（MO）。

森 弘暢（奈良高専ラグビー部監督）



奈良県出身

奈良教育大学卒 奈良教育大学大学院修了。

1999年から2000年まで奈良県橿原市公立学校教員。

2000年から奈良工業高等専門学校講師、准教授を経て、2022年より同校教授。全国高等専門学校ラグビーフットボール大会では2010年以降優勝8回、準優勝6回。ジャパンラグビーコーチングアワード2018受賞。奈良県ラグビーフットボール協会理事。

※氏名はあいうえお順

6. 一般発表（口頭）抄録

会 場：1405 教室 （13:10～16:05）

座長：青木 敦英（芦屋大学）

1) 13:10 - 13:25

「ラグビーにおけるハイパントの投射条件および足部速度の特性」

○ 馬場 玲玖（福岡大学院スポーツ健康科学研究科）他 2 名

2) 13:30 - 13:45

「ラグビー・ワールドカップ 2023 における多様性とチーム・パフォーマンス」

－ ヘッドコーチ国籍と選手の国籍構成に基づく記述統計分析 －

○ 高岡 慎一郎（甲南大学ビジネス・イノベーション研究所）

3) 13:50 - 14:05

「高校生のラグビー合同チームにおける効果的な指導法に関する提言」

－ 優位性・フェーズ局面・状況判断の観点から －

○ 岡本 吉高（大阪府立北摂つばさ高等学校）

座長：石井 信輝（摂南大学）

4) 14:10 - 14:25

「新聞・Web・SNS への広告出稿が観戦者行動に及ぼす影響」

－ 第 52 回愛知県ラグビー祭における分析 －

○早坂 一成（名古屋学院大学）他 4 名

5) 14:30 - 14:45

「ワンチーム」と「心理的安全性」

○高田 正義（愛知学院大学）他 4 名

6) 14:50 - 15:05

「トップリーグとリーグワンにおけるチーム順位の関係」

－ チームの強さの継続の検討 －

○高津 浩彰（豊田工業高等専門学校） 岡本 昌也（愛知工業大学）

座長 : 寺田 泰人 (桜花学園大学)

7) 15:10 - 15:25

「南郷家 親子2代のスポーツ」

－ ゴルフとラグビー －

○高木 應光 (神戸居留地研究会) 西村 克美 (前、明治国際医療大学)

8) 15:30 - 15:45

「全国高等専門学校ラグビーフットボール大会期間中の医務委員活動」

○吉矢 晋一 (西宮回生病院) 他 6 名

9) 15:50 - 16:05

「単一高等専門学校ラグビー部員の体格、体力および筋力について」

－ 学年およびポジション別の比較 －

○溝畑 潤 (関西学院大学) 他 7 名

【 1 】

ラグビーにおけるハイバントの投射条件および足部速度の特性

馬場玲玖¹、徳永淳哉²、布目寛幸²

¹福岡大学院スポーツ健康科学研究科 ²福岡大学スポーツ科学部

【キーワード】 ラグビー、バイオメカニクス、バントキック、三次元動作分析、キネマティクス

1. 緒言

ラグビーのバントキックは、エリアの獲得を目的として飛距離が求められるキック（ロングバント）と、ボールコンテストを狙うために滞空時間が求められるキック（ハイバント）の大きく2種類に分けることができる。ロングバントに関するバイオメカニクス研究はこれまでにいくつか報告されている。しかし、ハイバントについての検討はほとんど行われていない。バントキックの飛翔結果に影響を与える投射条件にはボール初速度、投射角度、インパクト時の足部位置などが考えられる。本研究の目的は、ハイバントにおけるこれら投射条件と、それに関連する足部速度の特性を明らかにすることである。

2. 方法

男子大学ラグビー選手 13 名が参加し、公式 5 号球を用いて、実験室内で全力のロングバントとハイバントを実行した。動作は 12 台のカメラを用いたモーションキャプチャシステム（Vicon Nexus, VANTAGE; Vicon Motion System, Oxford, UK）により 500Hz で計測した。各条件において、成功試技 5 回を分析対象とした。グローバル座標系は、前後方向（キック方向）を Y 軸、左右方向を X 軸、鉛直方向を Z 軸とする右手座標系として定義した。

算出項目はボールの初速度、投射角度、インパクト時の足部位置（鉛直方向の足部重心位置）、足部速度であった。足部速度は合成速度および各軸成分に分解して算出した。足部位置は、インパクトした瞬間の足部重心の鉛直方向

の高さを脚長で規格化した。対応のある t 検定を用い、有意水準は $p < 0.05$ とした。

3. 結果と考察

ハイバントはロングバントと比較して、ボール初速度と足部速度が有意に低く、投射角度、インパクト時の足部位置が有意に高かった。足部をより高い位置でインパクトさせる動作は、投射角度の増大に寄与するとともに、足部速度を制限する可能性があり、ボール初速度の低下と関連していると考えられる。

足部速度の特性に着目すると、ハイバントでは足部速度が低下しているにもかかわらず、Z 成分は有意に増大していた。一方、キック方向である Y 成分は低下していた。これらの結果は、足部の速度ベクトルを調整することで投射角度を制御している可能性を示唆する。

これらを踏まえると、ハイバントにおいて高い投射角度を得るためには足部速度 Z 成分の割合を増大させることが重要であり、それを可能にするために高い位置でインパクトが行われている可能性が考えられる。

表 1. 各キックにおける投射条件および足部速度の比較

	ロングバント	ハイバント	p値
初速度(m/s)	25.56 ± 1.43	23.18 ± 1.17	p < 0.01
投射角度(deg)	33.60 ± 4.75	68.17 ± 4.63	p < 0.01
インパクト時の足部位置(m / leg length)	0.34 ± 0.06	0.53 ± 0.10	p < 0.01
足部速度(m/s)	19.19 ± 1.11	17.87 ± 1.22	p < 0.01
足部速度 X成分(m/s)	4.07 ± 5.41	3.41 ± 5.56	n.s.
足部速度 Y成分(m/s)	17.59 ± 0.99	14.21 ± 1.73	p < 0.01
足部速度 Z成分(m/s)	0.62 ± 1.27	7.81 ± 1.70	p < 0.01

Values are means ± SD.
significant difference ($p < 0.05$). n.s., not significant.

【 2 】

ラグビー・ワールドカップ 2023 における多様性とチーム・パフォーマンス

—ヘッドコーチ国籍と選手の国籍構成に基づく記述統計分析—

高岡慎一郎（甲南大学ビジネス・イノベーション研究所）

【キーワード】 ラグビー・ワールドカップ、チーム・パフォーマンス、多様性、異文化、インクルージョン

1. 本研究の目的

2023 年にフランスで開催されたラグビー・ワールドカップ(RWC2023)に出場した 20 チームを対象に、ヘッドコーチ (HC) の国籍および選手の出身国構成という観点から、多様性とチーム・パフォーマンスの関係を整理し理解を深めることである。

2. 先行研究

経営学分野では、ダイバーシティ・マネジメント研究の蓄積があり、多様性が組織成果に正負両面の影響を与えることが指摘されている。また、異文化研究においては、文化的距離が組織行動やリーダーシップに影響を及ぼすことが示されている。インクルージョンや文化的距離の重要性は広く論じられており、本研究はこれらの議論をスポーツチームに援用する。

3. 調査対象と分析方法

分析対象は RWC2023 に出場した 20 チームであり、公開情報を基に HC の国籍 (自国/外国) と選手の自国出身者の割合 (以下、Home 率) を整理した。分析方法としては、データの全体像と傾向を把握することを目的に、記述統計方式を採用した。

4. 分析結果

上位チームほど HC および選手の国籍が自国に近い構成を有する傾向が確認された。一方、外国籍 HC を起用する場合でも、文化的距離の近い国・地域出身者が多かった。

5. 考察

HC の国籍 (自国/外国) と選手の Home 率 (高/低) を二軸とし、チーム構造を四つの類型に整理して、四象限モデルを提示した。

自国完結型チームは共通の文化背景を基盤とした高い一体感を有し、安定した成果を挙げやすい

構造にあることが示唆された。HC 招聘型および選手招聘型では、文化的距離の大小がチーム成果に影響する可能性があり、異文化間の調整が重要となる。多文化ハイブリッド型に分類される日本代表は、HC および選手双方において多様性が高く、組織運営の難易度は相対的に高いと考えられるが、適切なインクルージョン施策を通じて多様性を競争優位へ転換し得る可能性が示唆された。

また、企業における人材育成施策の要素は、ラグビー日本代表の選手育成にも参考になる可能性があると考えられる。



図:HC 国籍と選手の出身国に関する四象限モデル

6. まとめ

本研究は、HC および選手の国籍構成に着目し、スポーツチームにおける多様性とパフォーマンスの関係を探索的に検討したものである。分析は記述統計に限定されるものの、文化的距離やチーム構造の観点から戦績を考察する枠組みを提示した点に意義があると考えられる。今後は、選手や指導者の経験年数、在籍期間、質的データを加味した分析を行うことで、より精緻な分析・検討が求められよう。

以上

【 3 】

高校生のラグビー合同チームにおける効果的な指導法に関する提言

— 優位性・フェーズ局面・状況判断の観点から —

岡本 吉隆（大阪府立北摂つばさ高等学校）

キーワード：共通理解、機能理解、状況判断基準

1. はじめに

近年、高校ラグビーの現場においては、少子化や部員数減少の影響により、複数校による合同チーム編成が増加している。合同チームは競技機会の確保という点で大きな意義をもつ一方で、選手の競技経験、技術水準、身体的成熟度、戦術理解に大きなばらつきを内包しており、従来の単一チームを前提とした指導モデルの適用には限界がある。とりわけ、戦術の遂行を重視する指導は、選手間の理解格差を拡大させ、チームとしての一体性形成を困難にする可能性がある。そこで本研究は合同チームにおける指導の中核を「戦術の教示」ではなく、「状況の見方と判断基準の共有」に置くべきであるとの考えのもと、人数や空間を制約したミニゲームの活用に着目し、ミニゲームが選手に何を学習させるのか、またそれを合同チーム指導にいかに関与させるべきかを理論的に整理し、指導実践への示唆を提示することを目的とした。

2. ミニゲームで獲得されるもの

— 状況判断・フェーズ局面・優位性 —

ミニゲームは、人数、空間、時間といった制約を意図的に操作した簡略化されたゲーム環境であり、選手が試合と同質の課題を縮約された形で経験できる学習環境である。第一に選手は相手との距離、相対速度、味方の配置、空間の有無といった環境情報を直接知覚し、それに基づいて走る・パスする・キックするという行動を選択する。第二にミニゲームはフェーズ構造の理解を促進する。1フェーズごとに生じる優位性の変化や、優位性が消失した後に関与するかが可視化され、フェーズが「優位性の再編成単位」であることを経験的に理解さ

せる。第三に数的優位、質的優位、位置的優位、グループ的優位といった抽象概念が、「ズレ」「空間」「時間的余裕」として直接知覚される対象となり、優位性が理論ではなく行為可能性として認識されるようになる。以上のことから、ミニゲームは、状況判断・フェーズ理解・優位性活用という三要素を分断せず、統合的に学習させる実践環境として位置づけられる。

3. 合同チームで指導されるべき内容

合同チームの指導は、個々の技能の最大化ではなく、「同じものを見て、同じ基準で判断し、同じ方向へ動く」というチームとしての意味構造の形成を重要視すべきである。その為、指導の中心は戦術の型の習得ではなく、以下の三点に重点を置かれるべきである。第一に優位性の共通理解。第二にフェーズの機能理解。第三に状況判断基準の共有。抄録の文字数に制限がある為、上記の内容について詳細は割愛するが、発表においては上記三点について十分議論したいと考えている。

4. おわりに（提言のまとめ）

合同チームにおける指導は、戦術の移植ではなく、意味の共有である。ミニゲームは、そのための有効な教育的装置であり、優位性の知覚、フェーズ構造の理解、状況判断能力の形成を同時に促進する。本提言は、ミニゲームを単なる練習手段ではなく、合同チームにおける認知的・戦術的基盤形成の中核として位置づけることを提案するものである。

【 4 】

新聞・Web・SNS への広告出稿が観戦者行動に及ぼす影響 -第 52 回愛知県ラグビー祭における分析-

- 早坂一成 (名古屋学院大学) 岡本昌也 (愛知工業大学) 寺田泰人 (桜花学園大学)
高田正義 (愛知学院大学) 高津浩彰 (豊田工業高等専門学校)

キーワード：広告効果、購買行動、AISAS モデル

【目的】

本研究は、2024 年度に開催された第 52 回愛知県ラグビー祭における広告出稿と観戦者のチケット購入行動との関係を明らかにすることを目的とする。新聞・Web・SNS 広告の出稿タイミングや媒体特性と、直前期に集中した購入傾向との関連を、AISAS モデルの枠組みを用いて分析した。さらに、天候・試合カード・経済状況などの外的要因が行動決定に及ぼす影響にも注目し、地域スポーツイベントにおける効果的な広告導線の設計に資する知見の抽出を試みた。

【方法】

分析対象は、第 52 回愛知県ラグビー祭 (2024 年 5 月 19 日開催) におけるチケット販売実績および広告出稿データである。これらのデータは、主催団体である愛知県ラグビー協会理事 (広報委員長) より提供を受けた一次資料を用いた。販売データからは総販売枚数および直前 1 週間の販売比率を、広告データからは新聞・Web 広告の出稿日・出稿量、検索広告 (Google・Yahoo) の表示回数・クリック数を抽出した。特に、直前 1 週間での販売枚数が総販売数の 40.0% を占めた点に着目し、AISAS モデルの枠組みに基づき、各媒体が観戦者の「検索」および「行動」を促進した度合いを整理した。また、開催週の天候、対戦カードの構成、実質賃金動向などの外的要因についても合わせて検討した。

【結果及び考察】

一般販売のチケット販売総数に対し、直前 7 日間の販売が占める割合は 40.0%、直前 14 日間では 52.4% を占め、チケット購入は開催に近づくほど加速する傾向が明らかとなった。これは屋外スポーツ特有の天候

依存性に加え、観戦判断の保留傾向が背景にあると推察される。検索型広告では、Google のクリック上昇率が 13.8%、Yahoo が 12.8% を記録し (表 1)、新聞広告掲載日 (4/27・5/11) およびテレビ番組 (5/6) 放送後にはクリック率の上昇が確認された。これらのタイミングにおいて、新聞やテレビによる「Attention」獲得後に Web 検索広告が「Search」「Action」へ観戦者を導いた構造が見られた。ただし、販売総数自体は前年比で減少しており、経済状況、試合カードの魅力度、天候不安など、複合的な外的要因が販売行動に影響していたと考えられる。これらを踏まえると、今後の広告設計においては、各媒体が果たす役割を AISAS の流れに沿って明確に位置づけ、新聞・テレビ・Web を時間的に連携させる「導線設計」が求められる。さらに、検索型広告だけでなく、SNS などを活用した「Interest」醸成、ならびにリマーケティングによる再アプローチの仕組みを加えることで、「Search」から「Action」への移行率を高めることが期待される。

表 1 新聞広告に対する検索上昇率

新聞広告	Google 検索	Yahoo 検索
4/27	13.3%	6.2%
5/11	13.8%	12.8%

【参考文献】

- ラグビー観戦者における社会効果、観戦満足度、行動意図の関連性(2024)紺田俊,生涯スポーツ学研究 20(2)
ラグビートップリーグにおけるファンイベントと観戦意図に関する研究
(2011)山口志郎,スポーツマネージメント研究 3(1)

【 5 】

「ワンチーム」と「心理的安全性」

○高田正義（愛知学院大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、早坂一成（名古屋学院大学）、寺田泰人（桜花学園大学）、高津浩彰（豊田工業高等専門学校）

キーワード：ラグビー、ワンチーム、心理的安全性

【目的】

「ワンチーム」に関する発表を予定していた第13回大会(2020年3月)は、事情により中止となった。今回は、当初発表予定であった「ワンチーム」の概念構造を再考する。既に、①組織結束要因 (Shared Goal & Identity)、②組織関係要因 (Social Dynamics & Trust)、③組織構築要因 (Leadership & Structure) の3つを予測要因として提示した。

「ワンチーム」で象徴されるような機能的な組織を作るためには、コミュニケーションは欠かせない要素の一つであろう。コミュニケーションが組織づくりに有効に働くために、近年「心理的安全性」がクローズアップされている。心理的安全性 (Psychological Safety) とは「対人関係においてリスクのある行動をとっても、このチームでは安全であるという共通の信念」であると定義されている。本研究では「ワンチーム」の概念構造を再考する。その上で「心理的安全性」が、どのように「ワンチーム」に影響を与えたかを明らかにする。

【手続き】

1. 調査内容

- 1) インターネットによる情報
- 2) 書籍による情報

2. 分析

- 1) 内容分析法 (Content Analysis) を採用
- 2) インターネット記事より、抽出された単語データと記事に書かれている文脈による逐語分析を行い、抽出された単語を KJ 法によってグループ化を行った (量的・質的アプローチ)。
- 3) 書籍の内容から背景を予測し、一覧表を作成した (質的アプローチ)。

【結果と考察】

前任のエディター・ジョーンズ HC のスパルタ教育

から、ジェイミー・ジョセフの権限移譲型の指導方針の転換が選手に戸惑いを与えたと考えられる。また、様々な国から日本代表へと招集される選手達の文化的な障壁を乗り越える工夫が、「本音」ミーティングやリーダーグループ会議だったと窺われる。コーチから選手へ、選手からコーチへ、選手から選手へ、そしてコーチからコーチへと、目標のために厳しいことがお互いに本音で言える土壌が「心理的安全性」によって醸成されたと考えられる。

表1 ジェイミー・ジョセフの転換と修復

時期	主な出来事・転換の内容	ミーティング・修復の動き
2018年4月頃	「自主性」への戸惑い サンウルブズと代表の兼任により、ジョセフHCは選手と過ごす時間が減少し、指示待ちに慣れていた選手に対し、ジョセフHCは「自分たちで考えろ」と突き放し、選手側は「具体的に教えてくれない」と不満を抱くようになる。	リーダー陣との個別対話 主将のリーチ・マイケルらがジョセフHCと直接交渉する。選手側の不安を伝え、コミュニケーションの改善を求めた。
2019年2月	宮崎合宿での衝突 W杯イヤーの過酷な練習の中、選手たちは「自分たちで決めたい」という欲求があった。それと同時に、ジョセフHCの厳格なルールの間でストレスがピークに達するようになる。	「本音」のチームミーティング 選手だけで集まり「このままでいいの？」を本音で議論した。その後、ジョセフHCも交えて「何のために戦うのか」という根本的な目的を再確認する場が設けられた。
2019年5月	戦術・規律への不満 ハードな練習が続く中、一部の選手から「戦術が浸透していない」「ジョセフHCの求めるレベルに達していない」という焦燥感から軋線が生じる。	リーダーグループ会議(LG)の活性化 堀江翔太選手や田中史朗選手らベテランが、若手とジョセフHCの橋渡し役になる。戦術の細かい修正案を選手側から提示し、ジョセフHCがそれを受け入れる形を作った。
2019年7月	PNC (パシフィック・ネーションズ・カップ) 結果が出始め、ジョセフHCの「選手を信じて任せろ」姿勢と、選手の「自分たちで判断する」実行力が噛み合い始める。	レビューミーティングの改革 一方的な議義形式ではなく、選手が映像を見て課題を指摘し合うスタイルに完全移行。ここで「心理的安全性」が確立されたとされる。

【まとめ】

「心理的安全性」とは、単に仲良しグループになることではない。「目標のために互いに厳しいことを言える状態」を指すことだといえる。ジェイミー・ジョセフは、まさにこの「健全な衝突」を乗り越えて「ワンチーム」になったといえよう。

【参考文献】

- 1) 大村武則、ONE TEAM の真実：ラグビー日本代表を世界に押し上げたマネジメント力、大和書房
- 2) 藤井雄一郎、ONE TEAM はなぜ生まれたのか、PHP 新書

【 6 】

トップリーグとリーグワンにおけるチーム順位の関係

-チームの強さの継続の検討-

高津浩彰（豊田工業高等専門学校） 岡本昌也（愛知工業大学）

【キーワード】 トップリーグ リーグワン 順位相関

1. はじめに

トップリーグ（以下：TL）18年、リーグワン（以下：L0）4年、日本のラグビーは世界で戦うために常に進化してきた。プロ化の促進に伴い外国からチームに加わる選手も多くなり、ワールドカップに参加した海外選手のL0参加人数も増加し、選手の補強とともに競技のスキルレベルは全体的に向上している。TLから再編されたL0のシーズンは4年目を迎え再編の影響を検討する時期になっている。ラグビーは試合の番狂せが少ない競技であり、昔から上位チームと下位チームはほぼ固定されている。TLからL0にリーグの再編が行われチームの強さに変化があるか興味深い検討事項である。

2. 研究の目的

本研究では、社会人のラグビートームについてTLからL0へのリーグ再編によるチームの強さへの影響について調査する。

3. 研究の方法

日本ラグビーフットボール協会のHPおよびオフィシャルブックよりTLの17シーズン（2003-2021シーズン：コロナ禍のため中止になったシーズンは除外した）とL0の4シーズン（2022-2025シーズン）のチーム順位について21シーズン分のデータを収集する。TLとL0における平均順位をそれぞれ求め、散布図に表すとともにピアソンの順位相関係数を求める。求められた相関係数についてはF分布表でその有意性を確認する。上位リーグで試合をする多くのチームが長い間継続して上位のリーグに所属している日本国内の傾向を考えると、TLで強かったチームは継続してL0でも強いチームであると仮定する。順位データについて、地域リーグに所属しTLの成績がないシーズンについては比較データとしない。L0についてはディビジョン1（以下：Div1）の順位についてデータとする。Div1の成績がないシ

強さの継続

ーズンについては比較データとしない。

4. 結果と考察

TLとL0の順位の関係について図1に示す。相関係数は0.73で強い相関（ $p < 0.01$ ）が確認された。散布図より成績のグループ分けを行った結果、4つのグループに分かれることがわかった。TLとL0ともに上位にいるチームが3つ、TLよりL0では順位を落としているチーム3つ、TLよりL0で順位を上げたチーム2つ、TLでは下位の順位にありかつL0ではディビジョン2（Div2）の所属経験がありDiv1順位では下位の順位にあるチーム6つに分類された。以上の結果から、強さに変化がないチームと強さに変化があるチームがあることがわかった。

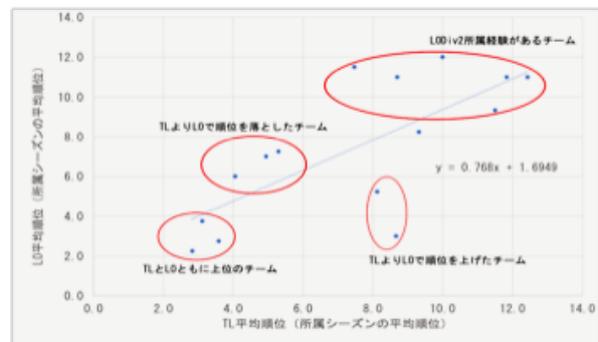


図1 TLとL0の順位の関係

5. まとめ

本研究ではリーグの再編によるTLとL0の順位の関係について調査した。その結果、順位の関係について4つのグループに分類されることがわかった。TL同様にL0で上位の順位を維持しているチーム、TLよりもL0で順位が落ちているチーム、TLよりもL0で順位が上がっているチーム、TL同様にL0下位の順位にとどまっているチームに分類された。リーグ再編によるチームの強さの変化は一部のチームで影響があることが確認された。

【 7 】

南郷家 親子2代のスポーツ

～ ゴルフとラグビー ～

高木應光 (神戸居留地研究会)

西村克美 (前, 明治国際医療大学)

キーワード: 南郷家と嘉納家

甲南と成蹊

ゴルフとラグビー

はじめに

父・南郷三郎は、関西に在って財界のリーダー役として活躍するとともに日本のゴルフ黎明期、その先導役を努めた。ところで、「南郷茂治盃」を争奪するのが、甲南と成蹊の定期戦である。両大学ともに創設は同様に、旧制・7年制の私立高等学校を母体に行っている。定期戦は1973年(昭和48)から始まっているが、その契機となったのは、成蹊および東大ラグビー部OB南郷茂治の甲南高等学校への奉職だった。

南郷家の親子二代の功績を理解することで、ラグビー界は多くの示唆を得るだろう。

研究方法

主として以下の史資料、文献を利用した。嘉納治五郎との縁を『御影が生んだ偉人 嘉納治五郎』で。父・三郎の軌跡を子息・茂治が辿る『南郷三郎回想「父・南郷三郎」取材の旅』。茂治自身の生涯を記した『雲海雑記帖』。他に『甲南ラグビークラブ75年誌』、『成蹊会誌』、『東京大学ラグビー部70年史1921-1991』など。

考 察

1) 父・南郷三郎

南郷茂光(元, 加賀藩士、海軍・主計大監(大佐))の次男・三郎は1878年、東京・赤坂氷川町にて誕生。やがて伯父・嘉納治五郎邸に寄宿し勉学と柔道を学んだ。東京高商では柔道部を創部し活躍。卒業後、大阪商船に入社。大阪財界の重鎮・田中市兵衛の孫・政子と結婚。柔道で運悪くアキレス腱を負傷、リハビリにゴルフを始めたところ、たちまち虜になる。日本初・六甲山のゴルフ場や鳴尾のゴルフ場に入会するも、山上への大儀さや閉鎖の憂き目に合い、自らがゴルフ場を造る決心をする。舞子ゴルフ倶楽部がそれだった。そのほか横屋ゴルフ・アソシエーションの再興(1922「甲南ゴルフ倶楽部」名で)、

日本ゴルフ協会(1924)や関西ゴルフ連盟(1926)の結成など。そのゴルフ界への功績は、大なるものがある。

2) 子息・茂治

子息・茂治は、父と同じく大叔父・嘉納治五郎邸に寄宿し、種々運動・スポーツに取組みセンスは秀逸だった。高校生ながら1930年第10回全日本バスケットボール選手権で優勝。近所に造られたとどろきゴルフ・コース(現, 野毛公園)で腕を磨き、1933年全日本アマチュア選手権ベスト8。また1923年、成蹊高校ラグビー創部時には、中学生ながらメンバーに参加。1930年監督・香山蕃率いるJAPANが、初の海外遠征をカナダに敢行。そのメンバーに成蹊高校の南郷と伊地知を選出している(カナダへは学校が不許可)。

主将・南郷茂治の東大は1勝7敗、高校時代に比べ不本意な戦績だった。父・三郎と甲南・平生理事長とは、財界で40年もの付き合いがあり、奉職先は甲南高校(西洋史)へ。ラグビー部監督にも就き、自らの体験を基に新しい知見を交えて指導。5年後、母校・成蹊へ戻りラグビー部監督に就くも、全国大会では2度も甲南の後塵を拝した。だが、それは南郷自身が蒔いた種が、花を咲かせたものでもあった。

戦時中セレベス島の師範学校々長に赴く。戦後は、高齢の父を助けるためにもゴルフ界へ。湯河原カントリー・クラブを手始めに、父が懇意にする廣池学園から瑞浪にゴルフ場建設を依頼され、さらには中伊豆村からのゴルフ場建設も。父が長年ゴルフ界で培った業績は、茂治にとっての財産でもあった。

1979年セレベスでの教え子たちが、南郷の徳を慕ってセレベスに招待し、謝恩会を開いてくれた。その8年後1987年1月7日、東京・港区済生会中央病院にて帰天。息子・茂隆(成蹊大ラグビー部OB)が、父の手を握り「お父さん、ノーサイドですよ、ご苦労様でした」と大声で最後のエールを贈ったという。

【 8 】

全国高等専門学校ラグビーフットボール大会期間中の医務委員活動

全国高等専門学校ラグビーフットボール大会医務委員

吉矢晋一 常深隼太郎 岡田文明 山本邦之 八十嶋仁 松本學 北田力

【キーワード】 高等学校専門学校ラグビー、外傷統計、外傷予防

はじめに

高等専門学校(以下、高専)ラグビーにおける外傷の発生に関して、これまで行ってきた活動の報告と過去 10 年間の大会期間中に生じた外傷統計の結果を報告する。

調査方法

毎年、大会における医務委員の活動記録に基づいて、外傷発生予防に関しての医務委員の取り組みと、過去 10 年間(2015 年度から 2024 年度まで)の大会期間中に生じた外傷の発生状況やその内訳について、調査検討を行った。

医務委員としての活動内容

毎年、原則としては、地区代表 10-12 校の参加で、1 月 4 日から 9 日まで、4、5 日の 1、2 回戦、7 日準決勝、9 日に決勝という日程で開催される。医務委員活動としてはまず、大会前日の代表者会議で大会期間中の医務関係の留意事項についての説明を行っている。

安全対策としては、毎試合の試合開始前にその日のコンディションについてセルフチェック(痛みや全身の状態に関する 10 項目のアンケート)を行い、それに対して医務委員の方で回答の確認をし、試合出場の可否について判断を行う。

また、試合ではスクラムにおける受傷が重大事故につながるため、1、2 回戦の試合前に対戦チーム同士でのスクラムセッションを行っている。試合中は、各試合に複数の医務委員がマッチドクターとしてサイドラインに控え、プレー中に生じた外傷の評価や対応(必要に応じた初期治療や再出場の可否判断)にあたる。

大会期間中に生じた事故の発生頻度

過去 10 年間の大会期間の試合中に生じた事故で、マッチドクターの評価や対応を要した事故の総数を表に示す。毎年 10-20 件程度の事故が発生し、1 試合あたり、1.47 件の発生状況であった。これを、以前に同大会での外傷発生の統計を調査された松本らの発表や、全国高等学校

(以下、高校)ラグビーフットボール大会での統計をまとめられた外山らのデータと比較したものが次の表である。

年度	1 試合当たり受傷人数
1988 - 1998 高専	1.52
1992 - 2001 高校	1.49
2015 - 2024 高専	1.47
2012 - 2021 高校	1.12

高専大会での事故の発生頻度は約 25 年前の統計とあまり変わっていないが、高校の大会では 20 年前よりも減少している。また、両大会を比較すると近年の高専大会の発生頻度(1 試合当たり 1.47 人)は高等学校の頻度(1 試合当たり 1.12 人)より高くなっている。発生状況の内訳においては、試合別では、準決勝の試合での外傷発生頻度が高かった。**過去に生じた重大事故**

試合中に発生する外傷においてもっとも重篤なものとして、頭部外傷と頸髄損傷が挙げられる。重症の頭部外傷や頸髄損傷に関しては、高専大会、高校大会ともに今回の統計中にその発生はなかったが、高専大会では調査期間外の 2000 年代にスクラムでの事故による頸髄損傷(永続的な後遺障害を残す)が 1 件発生している。また大会期間中ではないが、2024 年度の地区大会決勝戦においても、頸髄損傷が発生していた。また、脳振盪の発生状況についても、高専大会での頻度の方が高かった。

まとめ

医務委員として事故防止に務めているが、高専大会においては、同時期の高校大会と比較して、試合当たりの外傷発生や、重大事故の発生の頻度が高かった。

単一高等専門学校ラグビー部員の体格、体力および筋力について — 学年およびポジション別の比較 —

溝畑潤 (関西学院大学), 小森田敏 (神戸市立高専), 今野慶伍 (宮城教育大学大学院),
松橋瑠偉 (八戸高専), 森弘暢 (奈良高専), 柴田尚都, 兼村裕介 (仙台高専), 高津浩彰 (豊田高専)

キーワード: 体重, ベンチプレス 1RM, スクワット 1RM, 20mシャトルラン

緒言

高等専門学校 (以下高専と略す) は, 5 年一貫教育である為, 運動部活動に取り組む期間を長く確保できるメリットがある。

しかし, 近年は運動部活動に所属する学生も少なく, 特にラグビーフットボール (以下ラグビーと略す) は, ポジションの特性や人数を必要 (1 チーム 25 人) とする事など, 部を存続する事は至難の業である。さらに前述した在籍年数により, 部員間の競技力, 体格, 体力および筋力に差異が生じる。

我々はこれらの課題を解決する為の高専ラグビー研究会を発足し, 高専ラグビーの最適な指導の確立と環境作りに取り組んでいる。

本研究はその取り組みの一つとして部員の体格, 体力および筋力に着目し, 競技向上, 体力および筋力向上に必要な要素について検討した。

方法

対象: 全国大会に出場経験のある A 高専ラグビー部員 13 人を対象とした (1 年生 7 人, 2 年生 2 人, 3 年生 4 人)。なお現在, A 高専ラグビー部には 4, 5 年生が在籍していない為, 1 年生を下級生, 2 年生および 3 年生を上級生とし, さらにポジションはフォワード (FW) とバックス (BK) に分類した。

測定項目: 体格は身長 (cm) および体重 (kg), 体力は握力 (kg), 上体起こし (回), 長座体前屈 (cm), 反復横跳び (回), 立ち幅跳び (cm), 50m 走 (秒), 20m シャトルラン (回), 筋力はベンチプレスおよびスクワットの 1RM (kg), さらに徒手筋力の首および脚伸展 (kg) を測定した。併せて首, 胸囲, 腹囲, 臀部, 大腿および下腿の周径 (cm) の測定も行った。

統計処理: 各測定値は平均値と標準偏差で示した。また, 学年間およびポジションでの平均値については, 対応のない平均値の差の検定 (t 検定) を行った。

結果と考察

学年間において, 体格では体重 (上級生: 80.8 ± 14.7 , 下級生: 62.7 ± 8.3), 体力および筋力では握力・左 (上級生: 43.5 ± 9.8 , 下級生: 33.5 ± 4.2), 握力・右 (上級生: 45.7 ± 7.7 , 下級生: 36.1 ± 5.5), ベンチプレス 1RM (上級生: 72.9 ± 10.5 , 下級生: 53.0 ± 10.4), スクワット 1RM (上級生: 122.3 ± 15.2 , 下級生: 87.8 ± 15.3) および徒手筋力の首の仰向け (上級生: 21.0 ± 2.4 , 下級生: 15.0 ± 3.1) で上級生が下級生よりも有意に高かった。一方, 20m シャトルランでは下級生 (102.6 ± 15.1) が上級生 (81.2 ± 16.4) よりも有意に高かった。

また周径では, 全ての項目において上級生が下級生よりも有意に高かった (首・上級生: 38.6 ± 1.7 , 下級生: 34.6 ± 1.5 ; 胸囲・上級生: 95.3 ± 8.3 , 下級生: 79.9 ± 9.5 ; 腹囲・上級生: 85.2 ± 9.7 , 下級生: 73.1 ± 4.3 ; 臀部・上級生: 101.5 ± 7.6 , 下級生: 89.1 ± 4.6 ; 大腿・上級生: 57.8 ± 5.0 , 下級生: 49.0 ± 4.3 ; 下腿・上級生: 40.4 ± 4.3 , 下級生: 35.6 ± 2.1)。

ポジション別では, 20m シャトルランで BK (103.3 ± 122.3) が FW (80.3 ± 17.8) よりも有意に高かった。また, 徒手筋力の首のうつ伏せで FW (23.7 ± 6.2) が BK (18.9 ± 1.7) よりも有意に高かった。

これらの結果から, 高専ラグビー部員が練習やトレーニングを実施する場合は, 学年別に実施するなどの配慮が必要だと考えられた。また, 学年が上がるに従って持久力が低下する可能性も考えられた。さらに BK の首の強化も十分に行う必要があると考えられた。

まとめ

高専ラグビー部員の体格, 体力および筋力について検討した結果, 高専ラグビーの場合は, 学年間やポジションでの体格, 体力および筋力の差は大きいことが示唆された。

日本ラグビー学会事務局および大会事務局
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学人間福祉学部人間科学科
(溝畑研究室内) 溝畑：090-3039-2125

後援：関西学院大学

